力としての意識：ポパーによる心の存在論

池田　健人（Kento Ikeda）

大阪大学人間科学研究科

本発表の目的は、ポパーは心の実体性を閑却しているという批判に対して、むしろポパーは心の実体性を積極的に否定していたと主張するとともに、ポパーが推測していた心とはいったいどのようなものだったのかを提示することである。

心身相互作用論を採るポパーによれば、身体と相互作用する心の機能は、物的状態ではなく心的状態により実現される。これに対して、それならばポパーは心の実体性を詳解できなければならない、とする批判がある。というのも、物的状態が物的実体の状態であるように、心的状態も、それがもし存在しているのなら、いわば心的実体の状態でなければならないからである。その批判によれば、およそ状態なるものはすべて、ともかくも何らかの実体の状態である。すなわち、ある状態が存在しているのなら、その状態にある何らかの実体もまた存在していなければならない。してみれば、心的状態が存在することを認めるかぎり、ポパーは心的状態の基底をなす心的実体とはいったいどのようなものかを明確にする必要がある。それにもかかわらず、この重要な課題を放置したまま、ただ不十分な心身相互作用論の空想を展開しているだけである、ということでポパーは批判されている。

しかし、その課題をポパーが放置しているという主張は誤りである。なぜなら、およそ実体なるものの存在すべてをポパーは峻拒しているからである。ポパーによれば、究極的なモノとしての実体の概念は端的に偽であり、存在するのは、ただ実体を含む多様な形式へと絶えず変化しつづけるエネルギーの局面的なプロセスのみである。そうすると、これまで三次元的に耐続するモノだと考えられてきた対象は、じつのところ四次元的に延続するプロセスにほかならない。したがって、ポパーにいわせれば、そもそも物的状態を物的実体から区別する見方こそ間違っている。心的状態から区別される心的実体など存在しない、というのがポパーの立場である。それゆえ、ポパーの心身相互作用論における心は、心的実体へ依存的にではなく、心的状態そのものとして自立的に存在している。とはいえ、そうだとすれば、そこで心的状態とはいったいどのようなものなのだろうか。ポパーは、とりわけ心的状態のなかでも意識に注目し、それを物理的な力に比較しうるものとしてみなすことにより、心的状態の実相へ接近しようと試みた。本発表では、このようなポパーの議論を素描する。